

パーソナリティ

2023年9月14日

『そもそも論』(医学的基盤)の第6回。今回はパーソナリティを考えます。パーソナリティは「性格」です。心理は、生来もっている「気質temperament」、その気質と環境要因から生成される「パーソナリティ」、そして自分の意思で作れる「人柄character」の三層構造になっています(添付の図)。

そのうちのパーソナリティは「どう育てられたか」が非常に大きく影響します。頑張ったのに褒めることなく、甘やかしてはいけないと叱り続け、唯一の規範を押しつける親…。これは一種の虐待child abuse/maltreatmentです。このような環境だと子どもには安全基地がなく、心が傷つき、歪みます。自分のせいで何か不都合な出来事が起きても、すでに傷ついている心はその責任を引き受けることができず、自己を保全するため、自身の心情を妄想(A群)、他罰(B群)、回避(C群)のいずれかに転化します。

この転化の結果が同僚に対するいじめや攻撃、自らの失踪、事実の隠蔽などとなって職場に大きな問題をもたらします。さらに本人自身も病んでしまって抑鬱や不安に陥るとパーソナリティ症(旧パーソナリティ障害)という診断がつきます。パーソナリティ、パーソナリティの歪み(A～C群)、そしてパーソナリティ症は区別されるのです。パーソナリティの歪みの中でもB群のパーソナリティは職場の安寧を壊すことが多く、その対応は最も難易度が高いものになります。詳細は拙著を見ていただきたいのですが、複数の上司で対応する、感情的にならず法や社内規則に則って徹底的にクールに対応する、といった注意が必要です。

上記のようなパーソナリティの成因論的アプローチは教科書にはないものですが、現実に起きている現象を理解するのに役立つかと思います。ともあれ、パーソナリティは対人関係の要ですので、皆さん、子ども育てるときは注意しましょう。

